
キョウアイ

久住祐治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キョウアイ

【Nコード】

N8885Z

【作者名】

久住祐治

【あらすじ】

愛することは、夢を見ること。

それだけなら、どんなに幸せだったろう。

暖かい日が差していた。

目を覚ますと、ふかふかのダブルベッドで眠る自分の横で、あどけない寝顔を晒す大好きな人の姿。

その頬を、少しだけ指でつついてみる。ふに、と柔らかな感触。

「んう………？」

「あ、ごめん。起こしちゃった？」

「んーん、ちょっと目、覚めてたから………」

もぞもぞと体を起こして、その一糸纏わぬ美しい裸体を露わにした彼女は、隣でまだ横になる少女の頬を、お返しとばかりに指でつつく。

その感触がくすぐったかったのか、少女は小さく笑ってから体を起こす。やはり、彼女も何も身に着けてはいなかった。

けれど、お互いそれを恥ずかしいとも思わない。ここには二人だけ。二人しかいないのだから。

「ローラ、もう起きる？」

「うん。ご飯作らないとね」

「そっか。それじゃ、私も起きよつと」

金色の髪を持つ、先に目を覚ました少女、ローラに彼女はそう答えた。

暖かいまどろみにずっと身を預けているのも一興だったが、ローラがいないのでは自分もつまらない。

彼女、ローザはそう結論付けて、同じ金色の髪をふわりと回せながら、その裸体に下着とふかふかのバスローブだけを纏ってローラ

の後に付いていく。

豪奢ではないがどこか飾り気のある、一言で言うならセンスのいい寝室から出て、ローラの後を追うように白い廊下を裸足でペタペタと歩いていく。

いつからこうしているのだろう、もう思い出せないくらいずっと昔から、ローラとローザは一緒だった。

朝目覚めてから夜眠るときまで、常にお互いのそばにはお互いがいた。

飽きることはないその毎日。それだけでよかった、ただお互いがそばにいるだけで、二人は満足だった。

「ローラ、今日のご飯はなあに？」

「今日のご飯はフレンチトースト！ ハムとレタスを挟んで召し上がれ？」

「うわあっ！ 私、ローラのフレンチトースト大好き！」

「うふふ、ありがとっ。じゃあ、ローザの分は少しハム大目にしたげるっ」

互いに笑いあいながら、食器の準備をしていく。白くて浅く、広いお皿を二枚。レタスとハムを乗せる皿をそれぞれ一枚ずつ。

まっさらなテーブルクロスの上に純白の食器を乗せると、ローザは自分より少し背の高いローラの持つフライパンから下ろされてくるフレンチトーストに、嬉しそうに目をやった。

卵と牛乳、それと蜂蜜を混ぜて甘くした液体が染みこんだパンがカリカリに焼かれているのを見ると、否が応でも食欲が高まる。じゅるりと涎を嚼むのを見て、ローラは楽しそうにこころごとく笑う。

「本当にローラはフレンチトーストが好きね？」

「だって、ローラが作ってくれるんだもん！ 私、ローラが作ってくれるものは何でも好きよ？」

「あらあら。ありがとう、ローザ。それじゃあ、食べましようか？」

ええ！ と元気よく返ってきた言葉にまた微笑みながら、ローラは小さく手を合わせて「いただきます」と言う。

ローザもそれに倣って、同じように合掌。

初めはわからなかったが、ローラに意味を聞くと、どうやらそれは極東にある国の習慣なのだという。

おかしな文化があるのね、とローザが言ったとき、ローラは「私たちが生き長らえさせてくれる食べ物に感謝するのは、当然じゃない？」と言った。その言葉に、ローザはなるほど、と。そんな言葉しか返せずにいたのだ。

(だって、食べ物は何でも神様でもないのに。変だと思って)

そんなことも、あった。もう忘れてしまいそうなくらい、ずっと昔のことだった気がする。

でも、そうだったっけ。

(それは、昨日？ ううん、きつとちがう。もっとずっと前)

でも、その問いは結局答えなんて返ってこなくて。

どうしたの？ とローラに問われるまで、結局ローザはフレンチトーストをじっと見つめたまま合掌していたのだった。

それから少しの時間が過ぎて。

ふと、ローラに外に出てみようと言った。

「だめ」

けれど。その答えはとても冷たい声で。

「だめ。だめよ、ローザ。そんなこと言わないで」

「ど、どうしたのローラ？ 別にちよつと外に出るだけじゃない。ほら、あんなにお日様が出てる、駆けたりしたらきつと楽しいわ」

「ううん、だめなの。ここにいて、お願い。私とずっと」

ぎゅっ、と。

酷く強い力でローザの腕を掴むローラは、なんだか凄く焦っているようで。

その顔はとても、とてもとても、そう。なんだかとても、悲しそう。

(どうしたの？ ローラ、どうしてそんな顔をするの？)

心の中で問いかけても、答えなんて返ってこない。

そんなこと、ローザには分かりきっていた。

「……うん、わかった。出ないよ」

今まで見たこともないような辛い顔に、ローザは思わずそう言っていた。

外に出られないのは残念だけど、そんなことはいつでも出来る。

今このとき、ローラを悲しませたくなくて。

「本当？ 本当に出ない？」

「出ないったら。私、ローラにだけは嘔吐かないわ」

そう、ローラにだけは嘘を吐かない。

ローラに、だけは。絶対。

ローザの言葉に安堵したのか、ローラは本当にほっとした笑みを浮かべる。

さつきまでの悲痛な顔が嘘だったみたい、ぱあつ、と。窓の外に見える太陽にも打ち勝てるくらいに明るい笑顔。

それが見ただけで、ローザの心はとっても軽くなる。ああ、よかった、と。

「ねえ、御本を読みましょう！」

「どんな本？」

「えっと、えっと……」

ふと、ローラが言った。

けれど、自分で言った言葉につまってしまう。そんなローラを見ているのも、ローザは好きだった。

だけれど、困ってしまう。ローラのように同じ本でも同じように楽しめる人ならいいけれど、ローザは一度読んだ本はもう飽きてしまうのだ。

こればかりは性分だから、もう治しようもない。

新しく本を買ってくればいいのだけど、この家から町の本屋さんまでは結構距離があるか、あんまり行きたくないのがほんとのところだった。

(……………本当に、そうなの?)

ふと、心中にそんな言葉が沸き上がる。
そう？ なにが、なんのこと？ 自分の中身であるはずなのに、
それが分からなくなつて。

「……ローザ？ 大丈夫？」

「え？」

気がつくと、ローラが顔を覗き込んでいた。

可愛らしいその眼に映っているのは、いつもと変わらないローザの顔。けれど、少しだけ青ざめているように見えた。

「疲れたの？ 休む？」

「うん……、なんだか疲れたかも。一緒に寝よう？」

「うん！ 待ってて、食器片付けるから！」

ローラとローザは、いつも一緒に眠る。

気づけば、外は暗かった。

部屋を照らすのは、蠟燭の明かりと月の光。とても幻想的で、ロマンチック。

吸い寄せられるように窓に近づいて、そっと触れる。ひんやりとしたその感触がとっても気持ちいい。

「ローザ、行く？」

「うん」

ローラに手を引かれ、ローザは廊下を歩いていく。そつするうちに、なぜだかいやに眠気が強くなってきていた。

いつものように下着とバスローブを脱いで、そつとベッドに入る。

同じようにして、ローラも。

そうして同じように素肌を晒した二人は、ベッドの中でどちらからともなくぎゅっと抱き合っつ。

「……ローラ」

「なあに？」

「好き。愛してる」

「私もよ、ローザ。愛してる」

静かに口付けを交わす。

夜が更けていくと共に、私たちは互いの体を強く求めていた。

響く媚声に互いの興奮はさらに強まり、そうやって強く求める「とで、また声が響く。

延々と続く宴。あるいは、サバトか。

けれど。

（愛してる、ローラ）

その思いは。

例えようのない幸せは、決して嘘じゃないと。

そう、嘘を吐いた。

そこには、一通の手紙があった。

どこから現れたかも知れない、一枚の手紙。

一人の少女が昏々と眠り続けるそこにあつた手紙には、掠れた文字でこう記されていた。

愛してる。

掠れた文字。それが、何度も何度も、何度も何度も何度も何度も繰り返し綴られていた。

大き目の便箋にびっしりと、少し遠めで見れば、あるいはそれは真っ赤な紙にでも見えるであろう程に。

それは、まさしく。血によって綴られたものだった。

その手紙が置かれていた少女の名は、ローザ・ベイカー。五年前の交通事故で奇跡的に一命を取り留めた、奇跡の少女。

もう一三歳になる彼女の病室。そこから見える墓碑には、名が刻まれている。

それは、便箋の最後にわずかな空白を残して、小さく赤で書かれている名と同じもの。

ローザと同じ事故に遭って命を落とした、悲劇の少女。

ローラ・アシュレイ。

(後書き)

いかがだったでしょうか、「キョウアイ」。
ふと思いついて2時間ほど書き上げましたが、個人的には満足な
出来です。

たった二人で閉じてしまう世界、それは果たして幸福なのか。

本当は別のエンディングもありました。ちょっとハッピーでほろ苦
い奴が。

でも、書いているうちに気が変わって、こういうエンディングとな
りました。

ここから分岐でハッピーはないんですけどね。設定変わりますし。

またそのうち短編を投稿したときには、またよろしくお願いいたし
ます。

面白かったら、感想下さるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8885z/>

キョウアイ

2011年12月27日23時53分発行